

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03166

研究課題名（和文）19世紀ロシア帝国の文化統合における民族誌学調査の役割に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Role of the Ethnographic Research in Cultural Integration of the Russian Empire during the 19th century

研究代表者

下里 俊行 (Shimosato, Toshiyuki)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：80262393

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀のロシア帝国における民族誌学によるフィールドワーク調査の概要について、ロシア地理学会・民族誌学会およびロシア考古学会などによる文献史料を中心に調査し、とくに「セクト」と呼ばれた非公認の非伝統的宗派、「異教」と呼ばれたキリスト教以前の土着信仰に関する言説を調査・分析した結果、帝国政府の多宗派公認体制とは別の次元、つまりヨーロッパの知的共同体としてのアカデミズムの枠内で、帝国住民の非公認の信仰状態が文献およびフィールドワーク調査によって言語化されていたことが明らかに、この学問共同体が帝国の宗教文化の多元性を統合する機能を果たしていた可能性があることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀の民族誌学という学知の実践的な機能に注目することによって「セクト」「異教」等の「異他者」の表象と実体が、帝国アカデミズムの次元で国内の否定できない実在、「内なる異他者」として学問的に認証され、広義の文化統合の対象として位置づけられていたことを精密に理解することは、現代ロシアの多民族・他宗派の住民の「ロシア連邦」的文化的統合のあり方を考察するうえで有益な視座を与えてくれる。

研究成果の概要（英文）：This study examines 19th-century ethnographic fieldwork conducted within the Russian Empire. By analyzing archival materials from the Russian Geographical Society, its Ethnographic Department, and the Russian Archaeological Society, the research delves into discourses surrounding "sects" (unsanctioned non-traditional religious movements) and "paganism" (pre-Christian beliefs). Interestingly, the study reveals that beyond the empire's official policy of multi-confessional tolerance, the academic community, functioning as a European intellectual body, documented the unsanctioned beliefs of imperial subjects through texts and field studies. This suggests that this scientific community potentially played a role in integrating the empire's diverse religious landscape.

研究分野：歴史学

キーワード：ロシア 民族誌学 異教 セクト 異他者 アカデミズム 多民族 多宗派

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) ロシア帝国の宗教文化政策における未研究領域としての「セクト」と「異教」

最近の19世紀ロシア帝国史研究においては、帝国内の多様な宗教・文化的諸要素、特に帝国の周辺地域の多種多様な非ロシア正教徒（カトリック、プロテスタント、アルメニア教会各派、古儀式派、ユダヤ教徒、ムスリム、仏教徒）に対する統治政策の特質が帝国権力と被治者側の代表者達との相互作用を中心に解明されてきた結果、抑圧面だけではなく、各宗派に対する属人的個別対応や寛容・統合の側面へと研究力点が移行してきた（宇山2013；Werth 2014；長縄2014；青島2015など）。

だが、それ以外の政府による非公認集団として「セクト секты」と称された非伝統的諸宗派に関しては、これまで古儀式派との関係（安村1988）、モロカン派（安村2002）、福音主義派（竹中1999）についてそれ自体として検討されてきたものの、それら「セクト」に対する帝国支配層の眼差しは、「異教 язычество」と呼ばれたキリスト教以前の土着信仰に対する眼差しとならんで、十分解明されてこなかった。

もっとも帝国の宗教文化政策からは自立した「異教」の民間習俗としての「呪術」「民間信仰」については、民俗学・社会史・文化史の枠組みのなかで検討されており（白石1997；坂内1980, 1992；ハップズ2000）、18世紀についても具体的事例に則した研究もなされている（豊川2016）。他方、中世ロシア以降の「異教」と「キリスト教」との相互関係についても十分な研究蓄積（栗原1996；伊東2005；Бобрю2010；三浦2013；中堀2013）があり、ロシア正教会のテキストにおける「異教」的要素と「異種混交」した信仰実践のあり方が示されてきた。他方で、現代ロシアにおける「呪術」についての研究蓄積（藤原2004, 2010；田中2006）が十分にあることを踏まえると、19世紀のロシア帝国の宗教文化政策のなかでの「異教」「セクト」の位置づけを検討するならば、現代史にも通底する有益な示唆が得られる可能性がある。

### (2) 日本・ロシアでの19世紀ロシア民族誌学の歴史的形成の研究の希薄さ

他方で、これら帝国内の多種多様な非ロシア民族や非ロシア正教徒に関する学知を担ったロシア民族誌学や在野研究者による民衆学の創生・確立過程に関する研究蓄積は極めて弱く、古典的な学説史（Пыпин 1890；Токарев 1966）に限られている。また、ロシアの民族誌学研究者たちが主要な研究対象とした民衆文化・民衆信仰に関する研究としては、「古儀式派」を中心にかなりの研究蓄積がある。だが帝国の宗教政策との関連性に言及した研究は限られており（竹中1999；中村2002）、それら民衆宗教・民衆文化に関する「知識」がどのような歴史的な脈あるいは歴史的事件を通じて創出されたのかという「知識」の歴史的・権力的な構築性の側面については従来、十分に研究関心が向けられてこなかった。

### (3) 多民族・多宗派のロシア帝国における民族誌学の役割への近年の欧米研究者たちの注目

しかしながら、18世紀後半から19世紀前半にかけて民族誌学が、キリスト教教会ドグマや啓蒙思想の影響から相対的に自立し、隣接する歴史学・地理学・文献学等の領域を横断しつつ、フィールドワークを重視する実証的な学術領域として確立していく背景には、帝国統治の紀律化の進展とアカデミックな学知との緊密な連携があった（高田2012）という社会・文化史的背景が明らかにされていく中で、欧米では、いくつかの優れた実証研究が登場している。

例えば、エトキンド（Etkind 2011）は、ロシア帝国における国内住民の植民地化の過程における民族誌学の役割を重視し、ナイト（Knight 2009）は、地理学会・民族誌学部会内の動向とそこでの確執に注目しており、ツヴェトコフスキら（Cvetkovski&Hofmeiser 2014）は、アイデンティティと「他者」表象とが表裏一体的な関係性にあるという洞察に立脚して、西欧世界と対比させつつロシア帝国における民族誌学的な知識の創出過程を包括的に分析している。

だが、それらの研究は、ロシア地理学会・民族誌学部会における路線対立を「科学的な」西欧派と「イデオロギー的な」スラヴ派との対立という二元論的な図式に還元してしまうことで、民族誌学部会内の複雑な力関係による対立がロシア帝国の住民の文化統合という政策的課題に直結していたという視点を欠いている。

### (4) 19世紀以降に活発化する民族誌学者による「異教」研究に注目する必要性

他方、民族誌学者たちの民衆宗教・民衆文化への関心は、ロシアのキリスト教以前の土着信仰である「異教」的要素への関心と結びついており、ロシアの伝統的な支配的宗派であるロシア正教文化に還元され得ないロシア固有の文化の起源の探求という問題意識が背景にあった。例えば、ロック（Rock 2007）は、中世以来のロシア民衆の「キリスト教と異教との二重信仰」（двоеверие）という通説が、じつは19世紀になって構築されていったことを指摘しており、キリスト教以前の「異教」への関心は「近代」以降に急速に高まった側面がある。また、ヘレツ（Heretz 2008）は、古儀式派、セクト、フォークロアだけでなく1881年の皇帝暗殺事件や1891-92年の飢饉の際の民衆の動向を解明することで西欧的近代化に還元されないロシア民衆の多様な伝統文化を見出そうとしている。だがいずれも民衆宗教・民衆文化に関する知識形成におけるアカデミックな営みとしての民族誌学の独自の役割には注意を向けていない。ウィグゼル（Wigzell 1998）は、出版文化と読者とジェンダーの問題を視野に入れて民衆文化における占い・予言の現象を取り上げているが、帝国の学知や検閲当局の視点が考慮されていない。他方で、ヨーロッパを中心に哲学・思想・宗教史の観点から「異教」概念のもつ積極的な意義についての研究が始まっており（リオータル2000；松原2001；保坂2005a,b；馬場2012；杉本2017）、ロシア帝国史における「異教」概念のもつ役割について再検討する必要がある。すなわち、一方で支配的な諸宗派の眼差しから見た「他者」であると同時に、他方で世俗のアカデミックな視点から見た「他者」という二重の他者性をもつ「セクト」「異教」と名指された集団表象がロシア帝国の文化統合の側面でどのように扱われているのかを検討することで、帝国の文化統治を逆照射することができる可能性がある。

### (5) 本研究代表者の研究歴と課題：ロシア帝国の文化統合の弱い環としての非公認宗教の民族誌学研究

本研究代表者は、これまで19世紀ロシア帝国における反体制思想（特にナロードニキ、ニヒリズム、テロリズム）の研究を経て、ロシア知識人の「アジア」表象の問題に取り組む中で「西欧とロシア」という従来のロシア思想史における二元論的図式では、ロシア帝国における文化統合の複雑な過程を整合的に説明できないという結論にたどり着い

た。そこで帝国の文化統合におけるポジティブで自律した作用因として「ロシア正教神学」および「ロシア保守思想」の分析に取り組む中で、双方とも19世紀前半には帝国の文化統合という視点から見て実はエスニックな意味での「ロシア民族性」に固執していなかった(下里2014;2015)。むしろ1840年代以降、ロシア地理学会・民族誌学部長ナデージュデンを中心にロシア人のエスニックな民族的特性を実証的に解明するための理論的枠組みが起草され体系的な民族誌学調査が組織されたことが明らかになった(Симсога2015)。そこで浮上したのが、このナデージュデンが積極的に関与した民族誌学部会や内務省における民衆の宗教文化(特に「セクト」と「異教」)への視線のあり方を解明することでロシア帝国の文化統合とその限界の未解明な部分にアプローチするという課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀の多様な住民からなるロシア帝国での文化統合の過程に対して民族誌学(этнография)によるフィールドワーク調査は、いかなる役割を果たしたのかを明らかにすることである。具体的にはロシア地理学会・民族誌学部会に関わる文献資料を中心に調査し、ロシア正教会中心の多宗派公認体制から排除されてきた(A)「セクト」と称された非伝統的諸宗派、(B)「異教」と呼ばれたキリスト教以前の土着信仰に関する言説を調査・分析する。そのことによって、ロシア帝国の文化統合過程における帝國的アイデンティティ創出と表裏一体的関係にある「内なる他者」創出の論理を分析し、多民族・多宗派の住民からなるロシア帝国における文化統合の動態と限界を解明することをめざした。

## 3. 研究の方法

本研究では、19世紀初頭以降のロシア・アカデミズムにおけるドイツ・ゲッティンゲン学派のA.L.シュレーツァーによる民族誌学の理論的受容から始まり、1917年にロシア帝国が解体するまでを対象時期として、民族誌学調査に関する刊行物、『国民啓蒙省雑誌』、『ロシア地理学会紀要』、『内務省雑誌』を調査対象とし、特に「セクト」および「異教」に関する言説を収集・分析した。本研究の方法論上の特徴は、ロシア正教会から分離した古儀式派よりも厳しい摘発の対象となっていたと同時に、宗教的少数派として民族誌学的関心の対象にもなってきた「セクト」および「異教」を(その実体解明という視点ではなく)19世紀の民族誌学という学知のプリズムに内在する固有の視線と言説のもつ実践的な性格に焦点を当てて分析する点にある。つまり、「セクト」と「異教」に対する警察的・教会的な視線ではなく、民族誌的フィールドワーク調査に内在する自己のアイデンティティ創出と「他者」の表象化の論理を解明することによってロシア帝国の文化統合の観点からみてあれこれの民族誌学者達の実践の方向性を明らかにするという点である。

## 4. 研究成果

(1)2017年度は、第1に、ロシア帝国における「セクト」および「異教」に関わる民族誌研究の実態についてのフィールドワーク・資料調査を行った。具体的には、ロシア連邦サンクト・ペテルブルクのロシア民族学博物館、レーリヒ博物館、ベルギー・ジャイブーナミュールでの国際フォークロア大会、アルメニアおよびジョージアでのアルメニア使徒教会関連宗教施設群・グルジア正教会関連宗教施設群・ユダヤ教関連宗教施設群、ジョージア・トビリシのジョージア国立博物館、ポーランド・ワルシャワのユダヤ史博物館、ウッジのユダヤ教関連宗教施設群での実地調査・資料調査を行った。その結果、レーリヒにおける非キリスト教的世界観の重要性、ジョージア、アルメニアにおける「セクト」コロニーの存在等を確認することができ、「セクト」および「異教」の資料の地理的辺境性に注目することが不可欠であることが明らかになった。

第2に、文献研究としては、19世紀のロシア帝国地理学協会・民族誌学部会の形成過程とフィールドワーク調査の実態の一部を初代部会長カール・フォン・ベアおよび二代目部会長のニコライ・イワーノヴィチ・ナデージュデンに即して、地理学協会が発行した文献史料にもとづいて解明した。19世紀のロシアにおける神話研究の哲学的・神学的背景についてサンクト・ペテルブルク神学大学の神学者・哲学者であるワシーリー・カールポフの古代ギリシャ(つまり異教徒の)哲学者プラトンについての見解の変遷を時系列的に解明し、神話研究の哲学的基盤を明らかにした。同じくキエフ神学大学の神学者パムフィル・ユルケーヴィチの世界観について同時代の実証主義の隆盛という文脈におけるフォークロア文化を背景にした「価値論」への注目の背景を解明した。それらの研究成果については、2017年9月にロシア連邦・サンクト・ペテルブルクで行われた国際会議「ロシア的ロゴス—その地平と意義づけ」および国際会議「歴史と現代におけるスラヴ思想」で口頭発表するとともに、学術論文として発表した。

(2)2018年度は、第1に、フィールドワークとして、東ヨーロッパの民族誌研究の具体的な状況をスロヴァキアおよびハンガリーの博物館等で調査した。その結果、東欧におけるスラブ系諸民族の共通性と差異、およびスラブ系諸民族と非スラブ系諸民族との共通性と差異が、どのように構築されていったのかについて有益な示唆を得た。具体的には、西スラブ系諸民族における民族誌学的研究が、ゲルマン系諸民族との相克のなかで先導的に進展していった一方で、ハンガリーにおいてはファン族に代表されるアジア系諸民族との関係性を強調することによって独自のアイデンティティを構築しようとする姿勢が生まれており、民族誌学研究といっても、ロシア帝国におけるゲルマン系およびアジア系に対する両面価値的な姿勢とは異なる特徴があるのではないかという示唆が得られた。またザカルパチアのルシン人の位置づけの重要性についても確認することができた。ローマ・カトリック、フス派、ルター派、東方正教会、ユニアート等が混在共存している地域においては、ロシア帝国のように「セクト」や「異教」といった範疇で自・他区分する枠組みが相対化されている可能性についての示唆が得られた。

第2に、文献調査としては、ロシア帝国における民族誌学のフィールドワークの方法論と調査の歴史について文献史料にもとづいて論点を整理した。その結果として、ロシア帝国での民族誌学研究が、実証主義的なフィールドワークのための調査項目を設定する段階で、特定の哲学的・形而上学的な世界観を前提にしていた可能性があるのではないかという示唆が得られた。具体的には、人類集団を特定の価値基準で分類しようとする場合に、19世紀前半までは、時間軸を基準に「発展段階」という通時的な価値基準が重視されてきたのに対して、19世紀後半以降は、空間軸を基準に「文化圏」という共時的な価値基準がしだいに重視されるようになっていく傾向が見られ、そこに生物学的な本質主義的分類の土壌が生まれていくのではないかという仮説が得られた。宗教的な要素についていえば、時系列的に「異教」から「キリスト教」への移行を「正しい発展」と見なす世界観から、各種「異教」だけでなく、各派「キリスト教」

も、それらから派生した各種「セクト」も、「宗教」あるいは「宗教研究」という共通の認識次元における諸類型という共時性を重視する世界観へと移行しつつあったのではないかという示唆が得られた。こうした文化主義的方向性と生物主義的方向性との相克が、ロシア帝国での民族誌学研究的動向にどのような影響を与えたのかについて今後検討する必要があることが明らかになった。

(3) 2019年度は、第1に、フィールドワークとして、ロシア帝国の中央アジア地域における民族誌学研究的状況ウズベキスタンの博物館で調査した。その結果、ロシア帝国のロシア人(русские)研究者による中央アジアの民族誌学的調査が、帝国の民族的多様性について認識を形成し、ロシア帝国の帝国臣民としてのアイデンティティとエスニシティとしてのロシア人やその他の諸民族との差異の意識を醸成する土壌となったのではないかという問題設定と示唆が得られた。とくにイスラム教が支配的な地域におけるイスラム以前の諸信仰(仏教、ギリシャ多神教、ゾロアスター教、マニ教等)の痕跡が「イスラム」という一元的な認識枠組みとの関係で、どのように扱うべきかという研究課題の重要性が浮上した。第2に、文献調査としては、19世紀後半における人間観の変容を「身体」論を軸に分析・検討した。19世紀前半まで、ロシア帝国における人間観は、制度的な身分制のもとでの、一方で、啓蒙思想の「普遍的」人間像と、他方で、ロマン主義の「民族的文化的特徴」を重視する人間像との相克のなかで、19世紀後半以降は、人間の身体的共通性と身体的な差異を生物学的な観点から議論する論調と、人間の主観的意識の共通性とその意識内容の差異を心理学的な観点から議論する論調が台頭していくなかで、民族誌学研究にかかわるエピステーメ(認識枠組)が変容していくのではないかという仮説が得られた。今後は、人間の身体と意識をめぐる「学術的言説」(生物学・進化論・医学・心理学・教育学)の変容を検討するなかで、学問分野としての「民族誌学」の原理と方法論の変化との関連性を考察し、これらの変容・変化がロシア帝国の文化政策とどのように関連しているのか、いないのか、について検討する必要があることが明らかになった。こうした19世紀後半のロシア帝国の学知における認識論上の枠組みの構造変動が19世紀前半まで支配的であった「セクト」・「異教」観を変容させた可能性について精密に分析する必要性が浮き彫りになった。こうした問題の一端を学会発表「19世紀後半のロシア帝国の都市空間における心身観の変容——「大改革」以降の諸科学の動向を中心に」(ロシア史研究会・年次大会)で発表し、19世紀後半の生理学的な世界観が身体性に還元しようとした「心」の自立性(自由意志 воля)を心理学が擁護するという文脈のなかで、教会ドグマに束縛されない、「セクト」・「異教」における身体性と自由意志の問題が帝国の学知のなかでどのように扱われていたのかという、新しい問題設定を得るに至った。

(4) 2020年度は、パンデミック状況のなかで海外での資料調査・収集が困難な条件のもとで、文献調査に専念し、第1に、ロシア帝国の民族誌学の研究史を整理した。その結果、そこには二つの方向の問題意識が伏在していたことが明らかになった。一方で、ロシア正教の教義神学の観点から「異端・異教・異族人」の信仰に対する調査をおこなう必要性に立脚したものと、他方で、革命的知識人による反体制運動の潜在的可能性をもった正教会から「異端」と見なされていた人々についての共感的な理解の欲求にもとづくものである。その背景には、反体制活動家が政府の刑事罰(流刑・苦役)によって「中央」から「周辺・辺境」へと追放され、現地の人々と交流したことがある。第2に、19世紀後半における進化論、とくにハーバート・スペンサーの有機的進化の理論のロシア知識人による受容・批判の諸相を再検討した。このことは、民族誌学調査における人間観・身体観の変容と関連しているという観点からである。その結果、近代的な社会編成の主要な推進力としての生産・生活手段の私有化、労働の分割・分業に対して批判的な視点から民族誌学的調査の対象者に対して共感的な立場と、逆に否定的な立場とがはっきりと岐・対立していたことが明らかになった。またロシア正教の教義神学の立場の論者も、後者の立場に並行していたことも明らかになった。

(5) 2021年度は、ロシア民族誌学におけるフィールド調査の歴史について文献史料の調査をおこなった結果、以下のことが明らかになった。第1に、フィールドワークの調査には、各地域の在地知識人(教師・医師・農学者・聖職者など)が地理学・地誌学的な調査の枠内で積極的に参加していたこと。第2に、フィールドワークの調査結果は、ロシア帝立地理学協会を通じて、学術的なレビューを受けて、同協会の定期刊行物で公刊されることで、帝国レベルの情報共有がなされたこと。第3に、フィールドワークには、内務省が国内統治の観点から深く関与しており、とりわけ帝国統治に従順でない集団をあぶり出す機能を果たしていたことである。他方、ロシア民族誌学における「異教」にかかわる要素は、ロシア正教との関係で、比較的隠蔽されるかたちで言説化の対象になりにくかったこと。「異教」は、むしろ非学術的な文化活動分野(文学、芸術、習俗行事等)のなかで保持されていた傾向があることが明らかになった。その他、ロシア哲学研究における「異教」的要素の影響について、先行研究の分析や19世紀の文献について分析した。その結果として、キリスト教、とくに東方正教を受容する以前のロシア地域の土着の信仰のさまざまな要素が、従来指摘されてきたように「ロシア正教」の信仰活動だけでなく、そこから岐・対立するかたちで派生したロシア思想、ロシア哲学の世界観に少なからぬ影響を与えていた可能性があることが明らかになった。その際、重要なのは、ロシアの文化・思想に内面化されている「異教」的要素を、どのようにして析出することが可能なのか、方法論的な側面での課題があることも明らかになった。そこで哲学における理性・精神性・意識性に対立する要素としての「肉体」ないし「身体」をめぐる代表的知識人の言説を検討した。論文「一八六〇年代のロシアにおける進化論争：「身体」観の分析を中心に」では、身体の働きの特異性・専門化・一面的発達を指向する流れと、汎用化・素人化・多面的発達を指向する流れの相克を指摘した。「セクト」・「異教」との関連でいえば、前者が信仰儀礼における専門的聖職者の位階制のアナロジーとして社会発展を捉えるのに対して、後者は超越的なものとの直接的・肉体的な合一・融合と信仰集団の自己完結性と連動していると予想された。また論集『超越性と生との接続：近現代ロシアの思想史の批判的再構築に向けて』所収の論文「神化をめざす肉体：一八六〇年代の哲学者・教育学者ユルケーヴィチの思想」では、ロシア正教会の神学大学出身で、モスクワ大学哲学講座教授のユルケーヴィチの言説を事例として、世俗アカデミズム(哲学・教育学)が、「神の国」あるいは「神化」というカテゴリーを媒介にして、「ロシア正教会」の教義の枠内で超越的なものと肉体的なものとの一体化を志向する言説が展開されていたことを論証した。このことは、現世における身体の神的变化という点で、「セクト」や「異教」とどのような差異化が図られているのかという、新たな検討課題を提起するものとして意義づけられることができると考えた。

(5) 2022年度は、民族誌学のフィールドワークに関する文献調査の結果、以下のことが明らかになった。第1に、宗派帰属に関わる帝国の統計データは人口調査により把握され、正教徒、カトリック、プロテスタント、ユダヤ教徒、イ

スラム教徒、ウニアート以外のいわゆる「異教信仰者」(язычник)は「偶像崇拜者」(идолопоклонники)という範疇に数え上げられ、その数は18世紀末から19世紀初頭にかけて90万人から40万人に減少しているデータがあること。その背景には18世紀後半の沿ヴォルガ・沿ウラル・シベリアでの大衆的なキリスト教化の動きがあったと推定されることである(Кабузан 2008)。第2に、民族誌学のフィールドワークにおけるジェンダー・バイアスの問題、つまり、男性研究者・調査者は、調査対象の女性たちの調査に関してハードルが高いという問題が内在していること、その結果、民族誌学の分野に女性研究者が参入し始める20世紀初頭以前のフィールドワークの調査結果には、男性視線のバイアスが内在していることである。第3に、北方やシベリアを対象とした学術的水準の高い民族誌学的研究が進展した構造的背景には、西部地域やペテルブルクやモスクワなど大都市部での反体制運動の活動家たち(特に「人民の意志」派)が辺境地に流刑されたことがあり、その際、少なからぬ著名な研究者たちの出自が非主流の宗派と結びついていることである。その際、非主流の宗派の教養と、シャーマニズムなどの先住民族の信仰との関係性について、個別の質的分析をする必要性が明らかになった。第4に、大規模な民族誌学調査を実施した地理学協会は、フィールドワークの展開にあたって、前述の流刑者=研究者たちを積極的に登録しつつ、また彼らの研究成果を積極的に公表し、賞讃していたことである(Czaplicka 2020)。また現代ロシアにおける「新興教」の政治的意味についても検討した(Shizensky 2021)。

研究成果の発表としては、ロシア哲学・思想史における「異教」的な要素の境界を探るために、エヴラームピエフの『ロシア哲学史』の翻訳をおこなった。

(6) 2023年度としては、第1にフィールドワーク調査として、リトアニア、ラトヴィア、エストニアで資料調査をおこなった。その結果、ディエルトリバ(ラトヴィア) ジュニチ(リトアニア) タアライズム、マウイスク(エストニア)といったキリスト教以前の宗教文化への関心が高まっていることに注意を向ける必要があることを確認した。

研究期間全体にかかわる研究成果の概要は以下の通り。

19世紀のロシア帝国における民族誌学によるフィールドワーク調査の概要について、ロシア地理学会・民族誌学協会およびロシア考古学会などによる文献史料を中心に調査し、とくに「セクト」と呼ばれた非公認の非伝統的宗派、「異教」と呼ばれたキリスト教以前の土着信仰に関する言説を調査・分析した結果、帝国政府の多宗派公認体制とは別の次元、つまりヨーロッパの知的共同体としてのアカデミズムの枠内で、帝国住民の非公認の信仰状態が文献およびフィールドワーク調査と調査結果の博覧会・博物館での展示によって言語化・可視化されていた。このことは、アカデミズムの知的エリートが、従来もっぱらキリスト教の枠内で「神」と呼ばれてきた「超越的なもの」の社会的・文化的な存在様式を、特定の信仰の立場から距離をおいて「宗教」ないし「信仰」の次元として実証(主義)的に位置づけて学知化しようとした19世紀後半以降の思想潮流と関連していることを意味している。例えば、「異族人」の「異教」の偶像崇拜については、偶像、墳墓、聖域、オーナメント、碑文など可視化の対象とされた。他方で、「セクト」のうち「去勢派」については、他の「セクト」とは特に区別されており、その集団の国内「国家」的性格が危険視されるとともに、その「修道的」性格をキリスト教の修道制と区別することの重要性が指摘されていた(Кутепов1882)。

その際、具体的な民族誌学的フィールドワーク調査の担い手が次のような複数のコースを経て形成されたことが明らかになった。

第1に、国民啓蒙大臣セルゲイ・ウヴァーロフによる「異族人」を対象とした初等・中等教育機関の国費による整備の結果、この教育機関のカリキュラムに適應することができた元「異族人」のアカデミックな知的エリートが養成され、これらの知的エリートが学者・官僚・医師などの専門職として出身地または地方に赴任するなかで自己ないし異他者の宗教文化を言語化したこと(Савельев 1855)。第2に、デカプリストを先駆者としてその後の反政府運動の政治犯がシベリア等に流刑にされるなかで、自らのアカデミックな知的文化と同時代の実証主義的精神を背景に、国内の「未知の」宗教文化を言語化することが自らの愛郷心の具体的表現となっていたこと。第3に、この前2者の人脈を活用してアカデミズムベースの学術的調査隊や民族誌学研究者のフィールドワーク調査が組織されたことである。研究成果の発表としては、ロシア哲学・思想史における「異教」的な要素の境界を探るために、ロシアにおける「スピノザ」受容の様相と、19世紀後半の心理学研究の動向に関する口頭発表をおこなった。本研究の結果、ソ連期およびポスト・ソ連期における民族問題と宗教問題に対して、歴史学的な観点からの有益な示唆を与えることができ、現代ロシアの多様な文化理解に一定の寄与をおこなうことができると考えられる。

#### 参考文献

- Бобров, Александр Г. 2010 К вопросу о древнерусском "двоеверии"// Japanese Slavic and East European studies. 30. Императорское Географическое общество 1864-1886 Труды Сибирской экспедиции Императорского Географического общества. Санкт-Петербург: Кабузан, В. М. 2008 Распространение православия и других конфессий в России в XVIII – начале XX в. ;1719-1917). Москва. Карпов, А. В. 2008 Язычество, христианство, двоеверие: религиозная жизнь Древней Руси в веках. Санкт-Петербург: Кутепов, Константин 1882 Секты хлыстов и скопцов / Соч. Константина Кутепова. Казань. Московский публичный и Румянцевский музей. Этнографическое отделение. 1889 Путеводитель по Дашковскому этнографическому музею. Москва. Общество любителей естествознания, антропологии и этнографии. Комиссия этнографического отдела [Императорского Географического] общества 1878 Программа по собиранию этнографических данных для антропологической выставки. Москва. Рыбаков Б. А. 2015 Язычество древне Руси. 3-е изд. Москва. Пыпин А.И. 1890 История русской этнографии. Савельев П. 1855 Жизнь и трудах Дорджи Банзарова. Санкт-Петербург. Симосато Т 2015 Н.И. Надеждин: от эстетики и литературной критики к этнографическому изучению культуры//Вестник Московского университета. Серия 7. Философия. 5. Токарев С. А. 1966 История русской этнографии (Дюоктябрьский период). Москва. Svetkovski, R. & Hofmeister, A. 2014 An Empire of Others: Creating Ethnographic Knowledge in Imperial Russia and the USSR (Budapest). Czaplicka, Maria 2020 Gender, Shamanism, Race: An Anthropological Biography (Nebraska). Etkind, A. 2011 Internal Colonization: Russia's Imperial Experience (Cambridge). Heretz, L. 2008 Russian on the Eve of Modernity: Popular Religion and Traditional Culture under the Last Tsars (Cambridge) Knight, N. 2009 "Seeking the Self in the Other: Ethnographic studies of non-Russians in the Russian Geographical Society, 1845-1860." In M. Brach ed. Defining Self: Essay on emergent identities in Russia Seventeenth to Nineteenth Centuries (Helsinki). Rock, S. 2007 Popular Religion in Russia: "Double Belief" and Making of Academic Myth (London). Shizensky, Roman 2021 Slavic Paganism Today: Between Ideas and Practice (Prav Publishing). Werth, P. H. 2014 The Tsar's Foreign Faiths: Tolerance and the Fate of Religious Freedom in Imperial Russia (Oxford). Wiggzell, F. Reading Russian Fortunes: Print Culture, Gender and Divination in Russia from 1765 (Cambridge).

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 下里俊行	4. 巻 107
2. 論文標題 一八六〇年代のロシアにおける進化論争：「身体」観の分析を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア史研究	6. 最初と最後の頁 3-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 29
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 56-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 1
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 30-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名	4. 巻 1
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 200-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 下里俊行
2. 発表標題 ロシア・ポジティビズムにおけるスピノザの受容
3. 学会等名 「プラトンとロシア」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 下里俊行
2. 発表標題 19世紀後半の「情動」(affect)の位置づけ、またはロシアにおけるスピノザ受容の一断面
3. 学会等名 「プラトンとロシア」研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 下里俊行
2. 発表標題 19世紀後半のロシア帝国の都市空間における心身観の変容 「大改革」以降の諸科学の動向を中心に
3. 学会等名 ロシア史研究会・年次大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下里俊行
2. 発表標題 最近のロシア哲学史研究の動向について
3. 学会等名 「プラトンとロシア」研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 5- (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名
2. 発表標題
3. 学会等名 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 下里俊行
2. 発表標題 ロシアにおけるH. スペンサーの受容と自然観の変容
3. 学会等名 「プラトンとロシア」研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 イーゴリ・エヴラームピエフ、下里俊行、坂庭淳史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 637
3. 書名 ロシア哲学史	



1. 著者名 中村唯史、坂庭淳史、小椋彩（分担執筆 下里俊行）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 ロシア文学からの旅	

1. 著者名 貝澤哉, 下里俊行ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 335
3. 書名 超越性 と 生 との接続	

1. 著者名 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎、下里俊行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

1. 著者名 社会思想史学会	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888
3. 書名 社会思想史事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap下里俊行  
<https://researchmap.jp/simosato/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ロシア連邦	サンクト・ペテルブルク国立大 学・哲学研究所			
ポーランド	ヨハネ・パウロ2世大学			